Parker 氏に照会すれば、あるいは頒与してくれるかも知れない。（室賀信夫）

天理市史編纂委員会編
天　理　市　史

奈良県天理市は、旧丹波市町を中心に櫟本町・朝和村・柳本町・二階堂村・福住村の三町三村が合併して昭和二十九年発足したいわゆる新市である。この市域は近時は天理教本部の所在地として最も有名であり市名の由来となつているが、今さら揚言する迄もなく原始時代以来豊かな歴史事象にとむ地域であり、関係者一同のあしかけ四年に及ぶ努力によつて市史の刊行を見たことは誠に有意義なのがあろう。

市史は本文（一、〇四〇頁）と史料集（六〇三頁）の二冊よりなる。まず本文は、全体を概説と各説に分つている。便宜に従つて各説より紹介すれば、第一章地理学的考察では、自然環境・人文地理双方にわたつて、豊富な統計を用いて精説される。第二章考古学的考察では、先史・原史・歴史時代にわたつて、遺跡・遺物・古墳などが精説される（史料集に古墳墓一覧と金石年表がある）。第三章宗教では、概説に続いて、各社寺について今は廃された社寺についても記録を精査して言及され、特に天理教については、一節を設けて、立教の由来から現況までを概説される。この市史にあつては当然の事ながら、特筆される点であろう。第四章民俗では、年中行事よりはじめて、祭礼と祈願・宮座・日常生活・婚姻と墓制・伝説・民謡・方言・地名が、細かく採録されている。第五章文学、第六章人物では共に天理市に関係ある古典文学や人物が紹介される。

こうした各説を通じて、この地方が、いかに深くそして広い歴史事象を蔵しているかが存分に伺われるのであるが、前篇概説篇は他地域の史料を全く借用することなく、全篇文字通り天理市史の概説を以て貫かれている。古代・中世・近世・近代の章構成は通例ながら、たとえば第二章中世は櫟本庄・柳本庄・河原城庄など多くの庄園、かの著名な布留郷、十市氏豊田氏など大和武士の活躍、環濠に囲まれた郷村制の発展、そして中世の文化と、幾万言を費すとも語り尽せない歴史にみちあふれている。それこそ、いわゆる「国中」の東辺に位置して発達した天理市のすがたであり、この市史の特色である。

しかし、おそらくは紙数の制約の結果であろうが、表面的な歴史事象の羅列に終つて、堀り下げが必らずしも十分ではない。もちろんこの概説からでも教えられることは極めて多い。だがあえて望蜀の言を呈するならば、例えば庄園の四至復源、近世の複雑な領有貢租関係の整理、等々、各説の各章ほどの精緻さをもつて述べていただきたかつた、そしてこの市史においてはじめて果しうるテーマが他にも存するように思われる。

次に史料集は、文書では地区別に二六七点と、三箇院家抄（市城関係のみ）及び荒蒔村年代記を含み、古墳墓一覧・金石年表・小字名をのせる。文書部では、中でも天正より幕末に及ぶ荒蒔村宮座の年代記は、多方面の史料とし最ても注目される。なお史料集に載せられているのは各所蔵文書の一部と推測されるが、省略分については、切角の機会に、せめて目録を掲載されていたならば、利用には一層便利であつたろうにと惜しまれる。

以上紹介のかたわらあえて若干の苦言をも

呈したが、しかしそれによつて本書の価値はいささかも害われるものではない。本書はこの地域の研究者にとつて、必見の資料というべきであろう。（A5版　昭和三十三年三月　天理市役所発行　申込先同市教育委員会）

（熱田　公）

高知市史編纂委員会編
高知市史　上巻

市制施行七十周年記念事業の一つとして市史の編纂が企てられ、まず上巻が豪華な装いをもつてお目見えした。

歴史地理・社会経済史方面に真摯な研究を続けている市立商業高校教諭横川末吉氏が古代・中世編（長宗我部時代まで）を、旧藩主山内家にあつて長年、史料編纂に従事し、藩政史に造詣深い平尾道雄氏が近世編（廃藩置県まで）を執筆された。

高知市は昭和二八年一〇月以降いわゆる新市が続出するまでは県下唯一の市であつた。本書は高知のもつこの中枢的役割と、土佐のもつ南海の僻地的位置に対する十分な認識の上に立つてなされており、従つて市史の舞台を随時土佐一円に拡げ、また各時代を見るには日本の中央の動きを基として見ることに特に意を払つている。弥生式時代以来、本土における全国的な社会発展から「凡そ百年近」くも遅れていたが、南北朝時代からは「ほぼ全国的な動きと一致して行動しうる」までに追付き、明治維新の頃は全国に先駆けるほどに成長した土佐の歩みが克明に叙述されており、高知市史と銘打つものの、あるいは県史といつてもよく、さらに言うならば、県民の為の国史ともなつている。従前の名著大正一三年刊『高知県史要』と比較するとき、著者等の功による地方史学発達の跡が歴然と判る。例えば、元親をして大高坂城下町の建設を中途で断念せしめた根本的原因として、従来の水害説をとらず、在地給人の家臣団が、旧来の所領関係を変化させる近世化への進展に対して、これを喜ばなかつたこと、をあげるなど、新説卓見に満ち満ちている。

史料のうち、長宗我部地検帳の活用が目をひく。この帳は記載様式・内容において一般の大閤検地帳と異なり、土佐の特殊な社会構造を暗示している上に、一の欠冊も無く、極めて高く評価されているもので、戦後山内家から一般の利用に開放せられるに及んで当地方史学界の花形となつた（原本三六八冊は三三年から逐次刊行中）。

その外観の美もさることながら、内容においても香りいと高き本書は、全国の市史の中でも異彩を放つであろう。本書の出現は最近における地方区の修史ブームの一端をなすものであろうけれど、三二年本市刊行の日本都市学会近畿支部編『高知市総合調査』と経緯相待つて、現実の市政に資するところあらむを深く期待されているようである。このことは中巻（三五年刊行予定）以下の出現によつて、なお明らかにされるであろう。（上巻　B5版　本文六六六頁　昭和三三年一一月　高知市役所発行）

（谷澗梅亀）